

葉いもち防除効果の長い粒剤の育苗箱施用による葉いもちの防除効果

福島県農業試験場病理昆虫部・平成10年度春夏作試験成績概要

1 部門名 水稲－水稲－病害虫防除 01－01－23000000

2 要 旨

葉いもち防除効果の長い育苗箱施用剤が広く普及し始めている。このため、育苗箱施用を基幹とした防除を実施する場合における効果的な体系処理法を検討した。育苗箱施用剤のみ施用、育苗箱施用剤と穂いもち対象粒剤の体系、育苗箱施用剤と穂いもち対象散布剤の体系処理区を設け、圃場における葉いもち・穂いもち防除効果を調べた。さらに、圃場の周囲を無防除としいもち病菌の飛び込みを促した圃場と、周囲の防除を徹底しいもち病菌の飛び込みを抑えた圃場を設け、それぞれの圃場におけるいもち病の発生経過を比較検討した。

この結果、育苗箱施用剤と穂いもち防除薬剤との体系防除に比較して育苗箱施用剤のみの防除では、穂いもち抑制効果が低かった。このため、穂いもちの発生を抑えるには、育苗箱施用剤に加えて本田期の穂いもち防除薬剤と組み合わせた体系防除を行うことが重要と考えられた。また、圃場周囲からのいもち病菌の飛び込みを抑えた条件下と周囲からの飛び込みが多い条件下では、いずれの薬剤処理とも、圃場周囲からのいもち病菌の飛び込みを抑えた場合で、葉いもち・穂いもちの発生が低く抑えられた。このことは、個々の農家単位でいもち病防除を考えるより、広域的な集団でいもち病防除を行った方が防除効果が顕著に現れることを示唆している。

以上のことから、効果の持続期間の長い育苗箱施用剤を施用する場合でも、穂いもちに対する防除は必要であり、かつ、広域的な防除体制を確立することで、高い防除効果が得られると考えられた。